校長室だより～燦燦～ №９３８

３本柱

2024.1.5

趣味がほしい。ずっと、そう思ってきた。できれば、家人と共通のものがよい。だが、なかなか見つからない。もともと、何かのファンになるとか、何かに夢中になるというタイプの人間ではない。結局、いまだに趣味が見つからない。

そこで、考え方を変えてみた。自分にあるものは何か。長年、続けてきたもの、自分の人生に影響を与えているものを考えてみた。国語、イタリア、そしてソフトテニスである。すぐに飽きてしまう人間が、この３つに関しては、何かしらの形で続いている。

国語は、本を出版したことを区切りに終了しそうである。イタリアはというと、公的には、福島県国際理解教育研究会の役職を退くことになる。私的には、これからが本番である。ぜひ、再び長靴の国を訪れたい。

問題は、ソフトテニスである。テニスコートに足を運ばなくなり、もう４年になる。ここ３年は、ソフトテニス部会長として、中体連大会のときには会場にいた。挨拶をしたり、賞状を渡したりするのが役目である。会場では、今では中学生の保護者となっているソフトテニス部の教え子の皆さんとよく顔を合わせる。中には、小学生や中学生の指導に携わっている人もいる。教え子のお子さんが、大会で優勝し、表彰式で賞状を手渡したこともあった。一緒に記念撮影もした。

中学生の試合を見ていると、教えたくなる自分がいる。だが、一方で、やめておいた方がよいという自分がいる。ソフトテニスの指導に携わる大変さは身に染みている。３本柱のうち、一番、苦労してきているのがソフトテニスである。だから、長女が高校を卒業するタイミングで、テニスコートを離れた。

どうも、趣味がないと、平日の夜と週末が困る。やるべきことはあるのだが、そういうものほどなかなか進まない。そこで、考えた。教え子が携わっているソフトテニスクラブに顔を出すのである。練習のお手伝いをする。お手伝いというポジションがよい。そう熱くもならないだろう。複数の学校の小学生や中学生がいるのもよい。単独の学校であれば、その学校を勝たせたくなるだろう。家人の一言も背中を押した。「子どもたちがテニスを楽しそうにやっているのを見ているのが好き」

結局、遠ざかっていたソフトテニスに戻っていきそうである。大切なことは、自分が生き生きとしているかである。３本柱に共通しているのは、そこに生き生きと輝く自分がいるということである。無理に始める趣味では、きっと生き生きとはいかないだろう。

久しぶりに、クローゼットの奥から、冬バージョンのソフトテニスアイテムを出してきた。上下のコーディネートを考える。懐かしさがこみ上げる。物置から、テニスシューズとラケットも出した。まだ使えそうである。教え子にラインをした。「〇〇での練習に行ってもいいですか？」「もちろん大丈夫です！」よかった。